

原著 (Article)

DSM-5による素行障害と反社会性パーソナリティ障害

——自閉症スペクトラム障害との併存例の鑑定を巡る——

**Conduct Disorder and Antisocial Personality Disorder in
DSM-5: Psychiatric Evaluation for Comorbidities Cases with
Autism Spectrum Disorder**

宮川 充司*
MIYAKAWA, Juji*

要 旨

アメリカ精神医学会の診断基準 DSM-5による素行障害・反社会性パーソナリティ障害と、自閉症スペクトラム障害の二次障害ないし併存症として鑑定される殺人事件の非行・犯罪事例について考察した。

キーワード：素行障害，反社会性パーソナリティ障害，自閉症スペクトラム障害，二次的障害，併存症，非行，犯罪

Key words: Conduct Disorder, Antisocial Personality Disorder, Autism Spectrum Disorder, Secondary Disorder, Comorbidities, delinquency, crime

近年少年非行の補導・検挙数では明らかに減少傾向を辿っているが、その一方で極めて例外的なケースといえるにせよ、従来の非行の枠を越えた特異な残虐・凄惨な事件も後を絶たない。『少年非行情勢 平成26年1月～12月』（警察庁生活安全局少年課，2015）によると，少年非行全体は平成16（2004）年以降11年連続の減少傾向が示されるが，「少年による凄惨な事件が発生したほか，再犯者率の上昇，少年非行の低年齢化が続いているなど，少年非行を取り巻く情勢は，引き続き厳しい状況にある（p.1）」という。とりわけ，少年事件においても特異なものとして犯行動機のわかりにくい，あるいは猟奇的な動機による殺人事件が複数発生している。残虐あるいは猟奇的で暴力的な犯罪というのは，元来成人男子の犯行様態であったが，近年女子未成年者による殺人事件でもそうしたケースが複数発生している。また，こうした事例の中には何らかの神経発達障害（神経発達症ないし発達障害）があるにもかかわらずそれが見逃され，扱いにくいという特性のために，児童虐待・学校からの心理的な排除等の二次的要因が加わり，表面症状として素行障害（素行症）の方が顕著なものとなったのではないかと推定される事例があり，予防的な観点からも慎重な検討が必要である。中でも特に対人的共感性について重篤な機能障害があるにもかかわらず，その所在に気づかず，逆に周囲からの不適切な対応によって，症状が複雑化・深刻化していき，それが重大な犯罪とつながっていったと考えられる例が発生している。

素行障害と反社会性パーソナリティ障害：

自閉症スペクトラム障害を伴う未成年女子による凄惨な殺人事件

佐世保高1女子惨殺事件

2014年7月に起こった事件で、マンションで一人暮らしをしていた高校1年生の16歳少女Aが、クラスメイトの少女を殺害した事件で、遺体発見時にベッドの上に置かれた被害者少女の遺体は首と左手首が切断されていた。また、腹部も大きく切り裂かれていたという何とも凄惨で猟奇的な事件である。犯行の様態自体が、通常の少女非行とは一線を画している殺人事件で、犯行動機は各ジャーナルの報道、例えば週刊文春2014年8月7日号の記事¹⁾によると、殺人自体が目的で、さらに遺体を解体してみたかったというのが動機として語られているものである。しかも、被害者は加害少女の中学校からの数少ない友人の一人で、不登校気味のA子を心配して、A子が1人住まいをしていたワンルームマンションを訪れた矢先の何とも理不尽な犯行であった。犯行に使われたハンマーとノコギリは、1週間前にホームセンターで購入されていたという計画性の高い殺人事件と考えられるものである。

「人を殺してみたかった。遺体をばらばらにしてみたかった」

A子の口から語られた動機は、身も蓋もないほど異常で狂気に満ちていた。「A子は殺すために自分から被害者を誘ったと話しているが、両者のトラブルはなかったとのこと。気になるのは『以前、猫を殺して解剖したことがある』と明かしていること。被害少女の遺体を切断したのも、殺害後、犯行を隠すためにバラバラにして持ち運びやすくするためではなく、“解体そのもの”が動機だったという趣旨の供述をしている。今後は、精神鑑定が行われるのは確実です」（社会部記者）（週刊文春同記事、p. 22）

この事件の加害少女には、この事件以前に2つの前兆となる問題行動が見られたという。週刊新潮2014年8月7日の特集記事²⁾によると、Aには小学校の頃から、猫を殺して解剖したり、家出したりといった問題行動があった。Aの母親はそのことに胸を痛めていた。

もう1つは、小学校6年生の12月頃に起こった給食洗剤混入事件である。中学受験のことでクラスメイトからからかわれた腹いせに、漂白剤と洗剤を混ぜ合わせた液体を男女2名のクラスメイトの給食に混入したという事件である。この結果、クラス全員に謝罪し、A子は別室で授業を受けることとなった。学校側が決めたこの措置で、実母が付き添って別室登校をすることになった。それに弁護士の父親が抗議をし、それ以降A子は学校に来なくなった（週刊文春2014年8月14日・21日夏の特大号³⁾）。また、週刊新潮2014年8月14日・21日夏季特大号の関連記事⁴⁾によると、その保健室での別室登校では、A子に対して15回のカウンセリングが行われる計画で

あったが、それも2回で中断したという。このカウンセリングというのは、小学校の保健室ということから、教育委員会から派遣されたスクールカウンセラーによるものであろうが、もう少しカウンセリングの回数が継続されていたか、あるいは保護者が独自に判断して、素行障害（素行症）とその背景にあった自閉症スペクトラム障害（自閉スペクトラム症）の所在に気づかれた場合、その後の展開が異なってきた可能性もある。ただし、女子あるいは女性に限っていえば、知的能力障害を伴わない自閉症スペクトラム障害であると、表面症状が目立たないこともあり気づかれにくいことも珍しくない。したがって、1回か2回以下のカウンセリング面接で、スクールカウンセラーとて、神経発達障害の症状を見逃してしまう場合も珍しくない。というより、それで気づいたなら相当に熟練したカウンセラーといえただろう。また、素行障害の鑑別では、猫といった小動物への攻撃性（虐待や虐殺）は、後の人に対する攻撃性・残虐性のインデックスとも考えられている上、それがまた特に女子であり、対人的共感性の欠如といった側面では非常に重症な自閉症スペクトラム障害の症状も示していたといえるのではないだろうか。

A子の中学校3年の10月に、母親が膵臓がんで亡くなり、その頃から不登校傾向が見られた。翌年5月に父親は再婚するが、その再婚が決まった3月に、2つ目の事件が起こる。A子は自宅で寝ていた父親の頭を金属バットで殴り、大怪我をさせた。父親は、この事件は表沙汰にせず、A子を精神科に通わせることにした。4月から父親とは別のワンルームマンションで1人住まいをさせることになった。週刊新潮2014年8月14・21日夏季特大号の関連記事⁴⁾に記載されている、父親金属バット襲撃事件である。A子が高校入学と共に、ワンルームマンションで一人暮らしを始めたのは、A子を診察した精神科医の勧めだったという。勿論、その父親自身の安全と、再婚による義母との同居を望まないA子の意思を優先させた結果の選択であったが、その一人暮らしをさせたことが、さらにこの凄惨な事件を誘発させる可能性を高めたとも考えられる。

また、その弁護士の父親も事件の起こった2か月後の10月、自らの命を絶ったという何とも凄惨な事件の2次的悲劇である（週刊文春2014年10月16日号⁵⁾）。

なお、この事件は、加害少女が原則検察官送致（逆走）される16歳となる数日前に実行された事件ということもあり、少年院送致などの保護処分となるか、刑事処分相当として逆送されるか注目されていたが、2015年7月14日付の毎日新聞朝刊記事⁶⁾によると、家庭裁判所の判決は第3種（医療）少年院送致と決定した。その理由として、少女の非行については「残虐さ、非人間性には戦慄を禁じ得ない」、またその犯行が16歳の誕生日直前だったことにも触れ、「計画性の高さ、殺意の強固さも際立っている」としながらも、この加害少女に実施された検察による精神鑑定と家庭裁判所により実施された合計9か月に及ぶ2回の精神鑑定の結果から、他者との共感性を欠如した重度の自閉症スペクトラム障害（ASD）と素行障害と認定した。また、「ASDの中でも非常に特殊な事例」と判断した。また、遺族に厳罰を望む処罰感情があるに

もかかわらず検察官送致を選択しなかったのは「刑罰による抑止は効果がない。刑務所は特性に応じたプログラムは十分ではなく、かえって症状が悪化する可能性がある」とし、精神科医による長期の矯正教育と医療支援が必要と結論づけた。

個人的所見としては、極めて理不尽な理由による殺人及び遺体損壊の事件で、しかも非人間的かつ極めて残忍な方法で殺害され、首や手首まで切り落とされた被害少女遺族の被害者感情は推察して余りあるものの、精神鑑定の結果を踏まえた裁判所の判断は、社会的更正という視点からは、科学的には十分合理的なものと考えられる。ただし、この判決について裁判所関係の知人に参考意見を求めたところ、「犯行様態が通常の少年犯罪の枠組を超えた残忍さわまりない事件であり、被害者遺族が厳罰を求めているにもかかわらず、被害者感情が斟酌されていないので最悪の判例」というような厳しい意見を述べていた。これも、判例への意見としては1つの卓見であるといえるのではないか。

青年期という多感な時期に母親との死別という不幸な出来事が重なり、そのすぐ後父親が婚活を始めたことが、この女子生徒の精神状態をさらに悪化させてしまったのではないかと考えられている。母親の死は、このA子に社会への重要な接点を失わせたのではないだろうか。自閉症スペクトラム障害を有する子どもが、青年期に入るとさまざまな併存症が出現するケースは珍しくない。この場合、素行障害もその併存症であるが、むしろそうした犯罪行為に到る前に、周囲から孤立した自閉症スペクトラム障害の青年が、被害妄想といった妄想性障害ないし一過性の統合失調症様障害の症状を示す場合があることは、青年期の心理臨床に関わる専門家の間では良く知られていることである。とりわけ、自閉症スペクトラム障害であったとすると、恐らく社会との重要な接点の役割を担っていたと考えられる母親が亡くなっただけでも、大きな危機の到来が予測できるところであり、それをさらにワンルームマンションで一人暮らしをさせたことがさらに社会的孤立と逸脱を促進させてしまった可能性も考えられる。ただし、この暴力的な傾向を帯びた自閉症スペクトラム障害の併存事例は、専門の精神科医であっても、対応に苦慮する重症事例であつたであろうことは十分推測できることであろう。

女子大学生老女惨殺事件

佐世保高1女子惨殺事件と犯罪の様態、また推定できる加害者の精神鑑定上の所見とも極めて酷似した殺人事件が、その約6か月後の2014年12月に起こった。事件が発覚したのは、事件の発生から1か月20日後の2015年1月27日。1月27日の夕刊と1月28日の朝刊各紙⁷⁾は、一斉にこの事件を報道した。折から、シリアでISに拘束されている日本人やヨルダン空軍のパイロットの安否のことが大きな事件として連日報道されていた時期に当たるが、それでもこの事件は社会の関心を引くのに十分な衝撃的内容をもっていた。

名古屋市内の偏差値の高い国立大学理学部1年に在籍していた、19歳のいわばエ

リート女子学生が、一人暮らしをしている自分のアパートに新興宗教団体の勧誘活動をしていた77歳の老女を招き入れ、部屋に入室した直後部屋にあった斧で背後から頭部を殴りつけ、さらにその老女が首に巻き付けていたマフラーで首を絞めて絞殺した。しかも犯行動機は、「人を殺してみたかった」という、殺人そのものが目的とみられる極めて身勝手に一般の理解を超える犯行動機であった。また、大学に入学した4月にツイッターを開設し、『死にたい』とは思わないけど『死んでみたい』とは考える。『殺したい』人はいないけど『殺してみたい』人は沢山いる。」といったような後の犯行を思わせるような投稿があったという。同じツイッターに、1997年の神戸連続児童殺傷事件の少年A、2010年に起こった大阪教育大学附属池田小学校事件の犯人、2004年に佐世保市で起こった小学校6年生少女による同級生殺人事件の非行少女といった殺人事件に関する賞賛メッセージを投稿するなどの書き込みがされていた。また、この殺人事件当日の12月7日のツイッターには、「ついにやった」といったような書き込みがなされていたという、極めて現代的な犯行表明がなされていた。未成年の女学生が行ったとは思えない犯行様態のものである。また、犯行が発覚した1月27日の午前、前年の12月7日から行方不明になっている老女について、警察署で事情聴取を受け、警察が調べて被害者の足取りが途絶えているという女子学生のアパートに同行したところ、途中の車内で犯行をほのめかす供述を始めた。またそのアパートの浴室にその老女の遺体が、マフラーが首に巻き付けられた状態で発見され、凶器に使用されたと思われる手斧もケースが付けられたままの状態で鞆の中に残されていて、犯行を隠そうとした痕跡すらなかったという不可解な事件であった（朝日新聞2015年1月28日夕刊7面記事⁸⁾）。

また、2015年1月29日付朝日新聞朝刊の記事⁹⁾によると、遺体には頭を殴られたような傷が6カ所あり、うち3カ所は頭蓋骨が骨折していた。死因は窒息死ということだった。「小学生のころから人を殺してみたかった」、また、「(凶器の) おのは中学生の頃から持っていた」と話している。事件2日前の12月5日のツイッターに「M大出身死刑囚つってまだいないんだよな」といった書き込みがあった。「高校生のころ、同級生に毒を盛ったことがある」といったことも話しているということで、それがさらに過去の殺人未遂事件の発覚にも発展していくことになる。なお、この事件について詳細に調査を行った一橋(2015)によると、犯行に使用された斧は、刃部分の安全ケースがついたまま頭部を殴打するために使用され、そのためになお死亡しないためにマフラーで首をしめたのではないかと推測されている。また、それは中学の頃から宝物のように扱いをしてきた斧が血で汚されるのを避けようとしたことと、斧による殴打が、加害者の部屋が薬品くさいことを被害者からけなされたことによる突発的な犯行であったからではないかということを描いている。

2015年1月31日付朝日新聞朝刊記事¹⁰⁾には、殺人事件で逮捕された女子学生が、高校2年生の2012年頃、クラスメイトの男子高校生が突然視力低下や歩行困難に陥り、10月頃入院した。診察した医師は「原因は毒物のようだ」と指摘した。この先

行する事件の被害男子は、かろうじて両眼失明は免れたものの、片目の視力を失い、視覚障害の特別支援学校に転校することとなり、警察に被害届を提出した。高校に警察の捜査が入ったものの、事件は解明されなかった。このタリウム事件の前兆として、一橋（2015）は、事件の起こった年の5月に、加害者の父親が自分のクレジットカードを使用して、娘が変な薬品を次から次へと購入していることに気づき、娘を連れて仙台の警察署に相談にいった事実があり、そのことと高校でのタリウム事件に結びつかなかったのは警察のずさんな捜査のせいではないかという指摘をしている。なお、タリウム事件で使われた硫酸タリウムは、山形の薬局で、大学生を装って化学実験用の薬として購入したものであった。

週刊新潮2015年2月12日号の関連記事¹¹⁾は、この加害女子学生が大学のリーダー部（応援団）に所属する唯一の女子学生で、髪も短く刈り学ランを着た顔写真を掲載し、外見からもボーイッシュな女学生だったことを報じている。加害女子学生が中学校の頃互いに家を往き来していた友人の父親に、取材を行っている。その記事によると、「中学生になったころからおかしくなった。いつもカバンにハサミやカッターナイフを入れて持ち歩いていて、その理由を尋ねると、“『誰かに襲われたら、これで刺す』と説明していた。一番怖かったのは、うちに遊びに来た時、飼っている猫に刃物を向けて“これで尻尾を切ったらどうなるだろう”といった時でした」とか、「しばしば人を殺したいと口にしていて」、「あの子の家に行ったら、足の踏み場もないくらいに散らかっていて、そこにおのがあったそうです……。それから、何だか薬品にも詳しくなみたいで、“タリウムを飲んだらどうなる”だとかやたら難しい話をしていたと娘は言っていましたね」。また、近所の婦人の証言で、加害少女の自宅付近で2008年頃（推定で12歳頃）から猫の変死体や液体をかけられたり、足や尻尾がつぶされている猫が発見されたといった動物虐待事件があり、それも現時点では加害少女の犯行ではないかと見られている（p. 132）。また、老女殺人事件の2日前の12月5日のツイッターに「酒鬼薔薇君もタリウム少女も大好きですよ♪」（p. 133）という書き込みがあったということである。

加害少女の小学校4年生頃からの唯一の親友に直接取材した記事¹²⁾が、週刊文春2012年2月12号の関連記事に掲載されている。取材協力者も未成年者ということで、保護者同席の取材であることを断っている取材記事である。「A子がいつも残酷なことを考えていることは知っていましたが、妄想の世界のことを冗談で言っているだけだと思い、受け流しておりました。その一方でいつかこういう事件が起きるかもしれないと心配もしていました。ついに現実になってしまったのですね……」「言動が変わっている不思議な子で、中学の時から『護身用だ』と言って制服のブレザーのポケットにカッターナイフやハサミを忍ばせていた。すれ違いざまに私にハサミを突きつけてきたこともあります。『誰でもいいから人を殺してみたい』とこの頃から口にしていました」「中二のときに、私が飼っていた猫のしっぽをハサミで挟んで、笑いながら『切ってみたいなあ』とポロッと言っていたことがあります。中学生のときA

子が拾って飼っていた野良猫はしっぽがなかった。うちの猫に刃物をあてて、『毛を全部剃って同じ毛が生えるか調べて見たい』と言っていたこともある。自分の猫では実験してみたいです」また、A子による行為かは不明だが、A子の実家周辺では猫の変死が相次いでいた。また、大学生になってからA子のアパート周辺でも、A子が猫をいじめていたという目撃情報が警察に寄せられていたという。「ハムスターに薬品をかけたり、飲ませたりしていました。タリウムにはすごく興味を持っていて、何グラム使うと人体にどういう影響が出るとか、『目は見えなくなる』と話していました。(2005年に静岡県で起きた女子高校生による母親のタリウム毒殺未遂事件のことを)パソコンで詳しく調べていた。薬物の知識はかなりありましたね」(p. 34)「中学校では、常に十番以内の成績をおさめていました。特に数学はいつも95点以上。芸能人やテレビは一切関心を示さず、化学物質や、ギロチンなどの世界の処刑の仕方に興味を持っていました。キリスト教の話もしていて、イエス・キリストの磔刑に惹かれていました」(p. 35)といった親友の証言があり、中学生になってからの残虐性や動物虐待、その後の同級生へのタリウムによる毒殺未遂事件へと繋がる素行障害や独自の精神世界の一端が垣間見られる証言である。

2015年9月30日付毎日新聞朝刊の関連記事¹³⁾は、この一連の事件の加害女子学生を家庭裁判所が検察官送致(逆送)とする決定を行ったことを報道している。家裁が非行内容として認定したのは6件の事件である。まず、①2012年5月27日のカラオケ店で中学校時代の女子同級生に硫酸タリウムを飲ませて殺害しようとした事件(殺人未遂)、②同年5月28日～7月中旬高校の教室で2回にわたり男子同級生に硫酸タリウムを飲ませて殺害しようとした事件(殺人未遂)、③同年8月29日自宅でペットボトルに灯油を入れて火炎瓶を製造した(火炎瓶処罰法違反)、④同日未明、火炎瓶に点火して民家の縁台におき、窓を割った(器物損壊)、⑤2014年12月7日名古屋の自宅アパートで老女の頭を斧で殴り、マフラーで首を絞めて絞殺(殺人)、⑥同年12月13日前年8月に放火した民家の玄関郵便受けから油類をまき放火、住民を殺害しようとした(現住建造物等放火、殺人未遂)の6件である。逆送の決定理由は、「人が死ぬ過程を観察したかった」という犯行動機に対して「自らの好奇心を満たすための実験として行われ、酌量の余地はなく、犯行様態は極めて残虐」、殺人以外の非行内容も「一連の流れの中で行われた犯行で、殺人として切り離して扱うことは相当でない」とした。精神鑑定結果を踏まえ、「他者の気持ちを理解することができない、特定の物事に異常に執着するという精神発達上の障害があった」、しかし「責任能力に問題はなく、障害の影響は限定的で、原則通り逆送の決定が相当」とした。また、今後一般の殺人事件を含む一連の凶悪事件として裁判員裁判として扱われることになるという。

この逆送の決定要旨(裁判所が関係者に配布する判決要旨文)は、2015年9月30日付中日新聞朝刊¹⁴⁾6面に全文掲載、1面と34面記事に関連記事が掲載されているので、一部直接引用する。

それによると、検察官に送致する理由として、まず「殺人については、少年法の要件を満たすから、原則として検察官に送致すべき事案である。

犯行は、少女が人を殺してみたい、人が死んでいく過程を観察したいという自らの好奇心を満たすため、いわば実験として、何の非もない被害者に対して行われ、何ら酌量の余地はない。また、事前に犯行手順を計画して実行し、冷酷である。犯行様態は極めて残虐である。被害者の痛み、苦しみ、突然生命を奪われる恐怖は想像を絶するに余りあり、遺族の感情が極めて厳しいのは当然である。

その他の犯行も、硫酸タリウム投与によって生じる中毒症状を観察したいとか、焼死体を見たいという身勝手な考えから行われたものである。被害者らの苦しみは計り知れない。現住建造物放火・殺人未遂等も、自宅に何度も火を放たれる被害者の驚きと恐怖は、想像するに余りある。

少女が殺人時、既に19歳だったことも考慮すれば、事案の重大性、悪質性、残虐性を大きく減ずるような特別な事情が認められない限り、刑事処分以外の措置が相当であるとはいえない」と、未成年者の犯罪に対する家庭裁判所の決定要旨文としては誠に厳しい文面である。

また、検察官および家庭裁判所で、加害少女について2回にわたり精神鑑定が行われているが、そのことについて決定要旨で次の様に触れている。

「少女には、他者の気持ちを理解できないとか、特定の物事に異常に執着するという精神発達上の障害が認められ、一定の影響を及ぼしたことが認められるが、各犯行様態や当時の生活状況に鑑みれば、各犯行当時の責任能力にはいずれも問題はなく、影響は限定的であったといえる。また、生育環境・家庭環境に一定の問題がうかがわれるものの、そこまで大きな影響を与えたとはいえない。」要は成人の犯罪と同様に、刑法でいう精神喪失または耗弱状態にあたるかどうか（統合失調症ないし知的能力障害であるか否かのみ）の鑑定結果のみ考慮し、他は情状酌量の余地などないという切り捨て方をしたものである。これは、少年非行厳罰化の関係者は賛同し、神経発達障害の関係者は疑義を唱えたいくなるもので、今後議論を呼ぶものといえる。

決定要旨の文面では、この加害者の有している神経発達障害・精神疾患の名称が明記されているわけではないが、「他者の気持ちを理解できないとか、特定の物事に異常に執着するという精神発達上の障害」という記述が精神鑑定書には記載されていたのは、自閉症スペクトラム障害またはアスペルガー症候群といった具体的な障害名称であつたであろうことは十分推定できる。検察側が行った精神鑑定も、この診断部分は同じであろう。しかし、自閉症スペクトラム障害あるいはアスペルガー症候群といった神経発達障害のみでは、一連の犯罪の説明が困難である。当然、別の併存症についての鑑定が重要である。この点について、2015年9月30日付中日新聞朝刊34面の関連記事「心の闇 割れた鑑定」は、次の様に記述されている。

「複数の関係者によると、名古屋地検が依頼した鑑定医の指摘は、家裁決定と同様だった。一方、家裁が依頼した鑑定医は、新たな精神疾患が犯行に与えた影響を指摘

し、第三種（医療）少年院に送致して矯正教育をするべきだと意見したという。」

この家裁が依頼した鑑定医による「新たな精神疾患」とは、恐らく妄想性障害または統合失調症様障害ではないかということが推定できる。これは特に社会的に孤立した状況下にある自閉症スペクトラム障害の青年が、青年期にしばしば発症しやすい併存症である。統合失調症様障害とは、症状的には統合失調症とほぼ同じ、妄想・幻覚・まとまりのない発語、ひどくまとまりのないまたは緊張病性の行動、陰性症状（感情の平板化・意欲欠如）といった症状を示すが、症状が統合失調症に比べると一過性で6か月に満たない障害。妄想性障害は、妄想が主症状で幻覚がないかあっても優勢ではないものをいい、いずれもDSM-5の統合失調症スペクトラム障害および他の精神病性障害群 Schizophrenia Spectrum and Other Psychotic Disorders に分類される障害である。

併存症としてさらに考慮しなければならないのは、中学校時代に見られた猫の虐待・虐殺を繰り返していた、高校3年次には硫酸タリウムという毒物を用いた人への攻撃性へと変化していったということだとすると、その行動特徴からいえば中学生の時にすでに深刻な素行障害の症状が見られ、それが高校時代以降さらに悪化していったのではないかという考えは否定できない。この場合、特に深刻という表現を用いるのは、素行障害の4つの側面のうち、人及び動物に対する攻撃性、そのうちでも特に暴力といった粗暴な傾向は非行少年でも女子非行では稀である症状が顕著に見られるからである。素行障害の場合、鑑別事項として、少児期発症型（10歳以前の発症）、青年期発症型（10歳になるまでに素行障害の特徴的な症状が認められない）のいずれかであるかを鑑別する必要がある。この女子学生の事件について、フリージャーナリストの一橋（2015）が、かなり詳細に事件とその生い立ちについて調べた本を2015年9月に出版しているが、小学校高学年以前に素行障害を思わせる行動特徴（兆候）は報告されていないので、青年期発症型とみなされるのかもしれない。一般論として、小児期発症型の素行障害に比べて、青年期発症型の素行障害の方が更正（予後）がよいと考えられるが、それにしてもこの女子青年の犯行様態は余りにも重い。

次に、犯行時19歳の元女子学生の精神鑑定に、素行障害という併存症が付けられたかどうかという点、少なくとも生い立ちの過程としては中学・高校の時期に素行障害の特徴的な症状が見られたという鑑定はありえるが、鑑定時または犯行時の精神状態として素行障害の診断が成立するかどうかということになると、DSM-5の素行障害の診断基準（American Psychiatric Association, 2013/2014; 宮川, 2015参照）からいえば、疑問が出てくる。素行障害の適用には18歳という年齢指標があるからである。この18歳という年齢基準は、病院診療の年齢基準が、児童精神科ないし小児科の受診可能年齢が18歳未満、それを越えた年齢からは成人の診療区分となるからである。また、アメリカの少年法の適用が、徴兵年齢である18歳を区分年齢としていることにもよると思われる。

勿論、18歳を越えていても、状態によっては未成年者である限り適用可能である

が、その場合、素行障害の「診断基準 C. その人が18歳以上の場合、反社会性パーソナリティ障害の基準を満たさない」という基準があることに注意を払わなければならない。反社会性パーソナリティ障害の診断基準は、American Psychiatric Association (2013/2014) あるいは宮川 (2015) に示されるが、診断基準 A の 4 つ項目、「(1)の社会的規範の不適合と犯罪行為の繰り返し、(4)いらだたしさと攻撃性、(5)自分または他人の安全性を考えない無謀さ、(7)良心の呵責の欠如」の 4 項目は適合し、B の「18歳以上」C の「15歳以前に発症した素行障害（素行症）の証拠がある」は、適合すると考えられる。また、D の「反社会的行為が起こるのは、統合失調症や双極性障害の経過中のみではない」の基準は現時点では明確な判断ができないが、可能性としては当てはまる可能性は高いが、一方で統合失調症様障害といった統合失調症の類似症状が認められるとするなら、D の基準が当てはまらないという可能性も否定できない。

神戸連続児童殺傷事件の加害少年と厚生

神戸連続児童殺傷事件の元少年 A

2015年6月神戸連続児童殺傷事件の元少年 A が、『絶歌』という1冊の手記本を出した。この本の作者は、ペンネームも元少年 A。この出版物を巡り、マスコミでは大きな議論の渦が広がった。「事件の被害者から出版への同意を得ていない」、「殺人事件の加害者がこうした本を出版すること自体がとんでもない」、「未だに贖罪意識が欠如している」、「治っていない」等、どちらかという元少年 A に対するバッシングの嵐が吹き荒れた。勿論、殺人のみならず極めて残忍な遺体損壊の被害まで受けた被害児童の遺族が、とりわけ出版停止の意思表示をされたのは、当然の権利であり、歳月のみで決して癒やされることのない被害者児童のご両親のお気持ちは推察して余りあるものがある。しかし、マスコミベースで巻き起こった風潮は、どちらかという元少年 A あるいは当該出版物の出版社に対するバッシングの嵐といったものが主流であった。この出版物の内容について、週刊誌以外に、少なくともすでにこの元少年 A の犯行とその後の更正教育について熟知し、精神医学的な理解についても理解を有している2名の専門家が、極めて正確な事実関係に基づいて妥当なコメントを出している。一人は、その事件を神戸家庭裁判所において担当し少年 A の処遇について決定（判決）を下した、井垣康宏元神戸家庭裁判所少年部判事で、文藝春秋2015年8月号に寄稿した記事がある。また、同誌5月号には、その家裁審判決定全文が佐々木央共同通信編集委員の記事とともに公表されている。また、もう1人は、この少年 A について取材し、『少年 A 矯正2500日全記録』（草薙、2006）で知られる、元法務省東京少年鑑別所法務教官で、現在はジャーナリスト・ノンフィクション作家の草薙厚子氏で、『元少年 A の殺意は消えたのか』と題する2015年8月に出された出版物がある。

この事件は、1997年2月10日、連続して2名の小学校6年女子の頭をショックハンマーで殴り怪我を負わせた事件。同年3月16日小学校4年生女子の頭部を鉄のハ

ンマーで殴り死亡させた事件。同日別の小学校3年生の女子を小刀で刺し怪我を負わせた事件。いずれも通り魔的連続事件である。また、5月24日近所の小学校6年生男子を裏山に誘い出し絞殺し、裏山に隠してあった被害者の遺体を翌日、金鋸を用いて首を切断し、27日の未明に市立中学校の校門に遺棄した事件である。中学生男子が引き起こしたとは思えない猟奇的な殺人事件であった。この凶悪で猟奇的な事件を引き起こした14歳の少年について行われた精神鑑定の結果を、上述の神戸家裁の審判決定全文で触れている。それによると、1歳までの母子関係が希薄で愛着障害の疑いがあること、小学校5年の時に祖母が亡くなったあたりから、暴力性が出現し、ナメクジや蛙を殺したり解剖する動物殺しに性的な興奮を覚えるようになり、それが猫の虐殺へと繋がっていった。また、小学校6年の時クラスメイトの男子を激しく殴るという事件が起きている。中一の時に注意欠陥（多動）症と診断され、認知能力とコミュニケーション能力に問題があるので、医師は母親に過度の干渉をやめ、少年の自立性を尊重し、叱るより褒める方がよいと助言をしたという。いずれにせよ、家裁で行われた少年Aへの精神鑑定で、もっとも主要なものは性的サディズム（障害）であった。また、それ以外に自殺・他殺の危険性が高い、また精神分裂病（現在の統合失調症）や重度のうつ病、解離性同一性障害といった精神疾患が発症しやすいという懸念と、通常の少年院では十分な更正が望まれにくいという理由によって、第3種（医療）医療少年院送致が適当という処遇決定がなされた。

性的サディズム障害と素行障害の背景に、母親による虐待があったという考え方により、医療少年院では、母親役の精神科女医と父親役の法務教官による育て直しのプログラムの考え方で処遇がなされることになった。それらの背景に広汎性発達障害（現在の自閉症スペクトラム障害）の所在までは気づかれていなかった。その理由として、草薨（2015）は、家裁による精神鑑定がなされ、医療少年院における更正が開始された時期には、自閉性障害以外の広汎性発達障害の診断基準が普及していなかったせいではないかということを指摘している。ちなみに、アスペルガー障害（アスペルガー症候群）が広汎性発達障害の下位概念として知られるようになったのは、アメリカ精神医学会のDSM-IV（American Psychiatric Association, 1994/1996）からであり、それ以前の診断基準DSM-III、DSM-III Rまでは、特定不能の広汎性発達障害という診断概念は示されていたが、自閉性障害（自閉症）以外のアスペルガー障害といった非定型自閉症については診断基準さえ明確ではなかった。

さて、上述の元少年Aの手記本『絶歌』であるが、草薨（2015）が指摘しているように、この本の前半は一連の事件を起こし神戸家裁での決定がなされるまで。後半は、関東医療少年院を仮退院し、保護処分期間からその後の約11年間のことが書かれ、非行少年の更正期間としては異例の長期間、約6年半に及んだ医療少年院での出来事が、本人の視点からほとんど書かれていない。ただし、医療少年院における更正プログラムとその効果、仮退院後の保護観察期間での経過といった、元少年Aの変化は、草薨（2006）また草薨（2015）に詳しく記述されている。それを読む限り、性的

サディズム障害の改善を中心とした性的発達，家族関係，社会的対人的スキル，対人的共感性や贖罪意識の側面ではかなり大きな改善傾向が見られたと判断できるのではないだろうか。

神戸家裁の担当裁判官であった井垣（2015）による当該手記についての記事では，医療少年院の退院時には性的サディズム障害等による犯罪傾向は寛解状態まで改善し，仮退院期間元少年Aの身柄を預かって世話をした篤志家夫婦による贖罪意識の促進は有効であったが，良くなかったのは，保護観察期間の設定があまりにも短く，その後の経過が結果的な失敗を招いたのではないか。法律上の拘束がなくなった保護観察期間終了後も，専門家のサポートがなお必要であったにも関わらず，社会的支援停止となり結果的に職業的・経済的な困難を生じ，それが不十分な贖罪意識とその手記の出版につながった。不足していたのは，医療少年院における更正ではなく，その後の継続的な社会的支援とその後の贖罪行為そのものでなかったのかという鋭い指摘をしている。

当該の本の出版が贖罪行為としてではなく，被害者遺族の心情を考慮せず，生活困窮により生活費を得るためになされ，しかもその印税は被害者遺族への慰謝料の支払にも充当されることもなく滞ったままということは問題がある。しかし，本当に必要なことは，この元少年Aを執拗に社会的に抹殺するために追いかけ回すことでも，バッシングを続けることでもなく，再び同様な凶悪事件を引き起こすことなく，また決して許されることのない自らの罪の贖罪行為をどのように促していくかにあるのではないだろうか。これは，元少年A個人というより，社会の大きな責務ではないだろうか。個人的所感であるが，この元少年Aは，自分の犯した罪が家族特に2人の弟たちにこれ以上の大きな重荷を背負わせたくないという理由から，社会復帰後家族とは関わらずに生きていくという選択をしたとされているが，やはりこの元少年Aの罪を受容しながら温かい家族的な人間関係の下で社会的な支援を行っていく存在が必要ではないかと考えられる。勿論，もっと重要なのは，神経発達障害や児童虐待を背景にもつ少年に限らず，全ての子どもの発達について，取り返しの付かない殺人事件といった犯罪といった不幸な出来事と繋がらないような健全で多面的な社会的支援システムの構築が重要であることはいうまでもないことであろう。

■注

- 1) 佐世保高1女子「頭部・左手首切断」同級生の惨殺動機一親はなぜ一人暮らしを許したのか—週刊文春2014年8月7日の記事 (pp. 22-27)
- 2) 母の喪中に父婚活を憎んで「少女A」が解体した家庭と遺体 週刊新潮2014年8月7日号の記事 (pp. 22-27)
- 3) 加害少女父はA子を祖母の養子にしていた 週刊文春2014年8月14日・21日夏の特大号 (pp. 31-35)
- 4) 「全体殺人衝動」知りながら「少女A」を街に放った父 週刊新潮2014年8月14日・21日夏季特大号の記事 (pp. 26-29)
- 5) 佐世保高1女子惨殺「父自殺」本誌が掴んだ全情報 週刊文春2014年10月16日号の記事

(pp. 131-133)

- 6) 少女医療少年院送致 佐世保高1殺害「矯正可能性残る」 毎日新聞2015年7月14日(朝刊)1面記事, 佐世保高1殺害 更正重視に評価二分 被害者父は落胆の涙 同日紙29面記事
- 7) アパートに77歳遺体 昭和区19歳「自分がやった」 朝日新聞2015年1月27日(夕刊)9面記事, 名大19歳女子学生逮捕 昭和区自室で77歳殺害容疑 朝日新聞2015年1月28日(朝刊)35面記事等
- 8) 凶器? おの, かばんに 殺人容疑, 名大生 遺体放置し帰省 朝日新聞2015年1月28日夕刊7面記事
- 9) 殺人願望「小学生から」 77歳殺害容疑の名大生供述 朝日新聞2015年1月29日朝刊27面記事
- 10) 殺人願望 心の闇 容疑女子学生 話した動機 朝日新聞2015年1月31日朝刊35面記事
- 11) 心に魔物を育てた老女殺害「名大女子学生」 特集19歳の履歴書 週刊新潮2015年2月12日記事 (pp. 130-133)
- 12) 名古屋大学生老女惨殺 唯一の親友が証言「狂気の衝動」 週刊文庫2015年2月12号記事 (pp. 34-36)
- 13) 元名大生の逆送決定 名家裁六つの非行内容認定 毎日新聞2015年9月30日朝刊27面記事
- 14) 「元名大生責任能力あり」知人殺害, 名家裁が逆送 中日新聞2015年9月30日朝刊1面, 元名大生逆送決定要旨 中日新聞2015年9月30日朝刊6面, 心の闇割れた鑑定 元名大生 検察と家裁で実施 中日新聞2015年9月30日朝刊34面

■引用文献

- American Psychiatric Association. (1994) *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Fourth ed., DSM-IV*. Washington, D.C: American Psychiatric Association. (高橋三郎・大野裕・染矢俊之訳 1996 DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- American Psychiatric Association. (2013) *Diagnostic and statistical manual of mental disorders. Fifth Edition: DSM-5*. Washington, D.C: American Psychiatric Association. (日本精神神経学会日本語版用語監修 高橋三郎・大野裕監修 染谷俊之・神庭重信・尾崎紀夫・三村将・村井俊哉訳 2014 DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- 一橋文哉 (2015) 人を、殺してみたかった一名古屋大学女子学生・殺人事件の真相― 角川書店
- 井垣康宏 (2015) 元少年A『絶歌』に書かなかった真実 文藝春秋, 2015年8月号, 138-147.
- 警察庁生活安全局少年課 (2015) 少年非行情勢 平成26年1月~12月 (<https://www.npa.go.jp/safetylife/syonen/hikoujyousei/H26.pdf> からダウンロードできる)
- 草薨厚子 (2006) 少年A矯正2500日全記録 文藝春秋
- 草薨厚子 (2015) 元少年Aの殺意は消えたのか―神戸連続児童殺傷事件手記に見る「贖罪教育」の現実― イースト・プレス
- 宮川充司 (2015) DSM-5による反社会性パーソナリティ障害・素行障害とサイコパス 相山女学園大学教育学部紀要, 8, 47-58.
- 元少年A (2015) 絶歌 太田出版
- 佐々木央 (2015) 少年A神戸連続児童殺傷家裁審判「決定(判決)」全文公表―裁判所が認定した事実こそ少年事件を考える原点であるべきだ― 文藝春秋, 2015年5月号, 314-342.